
Filius Bodhi

繻祥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Filius Bodhi

【Nコード】

N6525S

【作者名】

繚祥

【あらすじ】

人間社会に紛れて生きる悪魔と人々を描くSF作品（思弁小説）。

進んだ技術は人々から知識を奪い、常識をねじ曲げた。当たり前のように浸透していた概念も忘れ去られ、宗教じみた考えが暮らしを支配している。そしてその思想の要であるデミウルゴス協会は秘密裏に悪魔を作り出していた。

人と悪魔との共存は可能か。そもそも悪魔とは如何なるものなのか。

——人間は、欲望を矛に狂乱を招き、無知を盾に安定を得る。

プロローグ

生まれたての赤ん坊ほどに大きな卵が、ドクン、ドクン、と静かに脈うっている。生々しく、魅力的なそれはいま解放の時を迎えようとしていた。

燭台の上では歓喜の瞬間を催促するかのように火が踊り、影を歪めた。照らされた空間は子宮内を想起させる。卵の周囲に描かれた模様もまた、薄暗がりから怪しく浮かび上がる。

儀式服を身にまとった細身の男が部屋の隅から現れた。

暗色の衣は、見事にその世界へ溶け込んだ。

渴いた唇が開き、震える。

一言ずつ、一歩ずつ。

唱えながら卵の目の前まで近づき、片ヒザをついた。男はそこでいったん言葉をつぐむ。緊張が一気に高まっていく。

息詰まる空気が、パキッと割れた。いや、正確には卵の殻が割れたのだった。中から黒い手や頭部が見え隠れしている。その物体は外に出るため、必死に隙間を広げていった。

しばらく様子を見ていた男が、耳をつんざくような鳴き声を聞くと再び言葉を発した。そして、懐から取り出した刃物で自分の左手を傷つけた。外気に触れた鮮血は、形を無くし重力の従者となった。

警戒の意をあらわにする、黒い生物の頭上にその手を持ち上げる。すると興味を示し、チロリと舐めた。まるで子犬のような仕草だ。強張っていた男の表情も、いくらかゆるむ。

ロウソクの火がゆらいだ。

目が、ギラついた気がした。

——悪魔の卵は高値で売れる。

富豪だけが許される享樂。誰も知らない、周知の事実だ。世に放った悪魔は護衛に、愛玩に、雑務に。購入者の目的は人それぞれである。

01 「はじめて」「に」「いびつ」「はつきもの（前書き）」

この物語には差別的表現が含まれています。お読みになる方はご注意ください。

01 「はじめて」に「いびつ」はつきもの

しなやかな筋肉は灰色の毛皮に隠され、肉をも切り裂く鋭い爪は、ほどよい長さで整えられている。

伏せ倒した胴体の横に足を投げ出した。目を閉じると、息のリズムと腹の動きが連動していることに意識が向く。

まどろみの中、主人の声を聞いた。

「……『時間と空間は永遠を求めさせた。そして先駆者たちを煽り、楽園へ閉じ込めた。ここは最早、偽りばかりが残留する所である』……これも神話の類だな」

本をめくる音。深くは考えないことにしたらしい。

日なたで受ける暖かさに、あくびをした。

コンコン。

控えめにノックする音が来訪者の登場を告げる。

片目で見やった主人の顔には、明確な不快さが表れていた。

数秒が過ぎ、ドアは返事を待たずに開かれた。

「勝手に入らないでくれるかな、メシー」

溜息まじりで、本を眺めながら、入室してきた者にトゲをさす。

本の文章を目で追ってはいえるものの、すでに集中力は無い。

「お父上が呼んでいらっしゃいます、ヴァレンク様」

その歳相応の高い声だ。二人が同い年とはいえ、メシーのほうが若干幼く見える。

いつも詫びの一つもなく、用件だけを言うのは嫌味かと、またヴァレンクの不機嫌さは増す。しかし、無言でいるとメシーも無言でその場に立ち尽くすため、わかったよ、と返事せざるを得なかった。

まだ窓辺に寝転がっている犬も連れ、彼らは部屋をあとにした。

+ + ○ + 8 + ∞ + 8 + ○ + +

「九歳の誕生日おめでとう！」

第一声を放ったのは父親のイリヤだった。なぜか赤鼻をつけ、派手な服装で二人を歓迎した。

つつけばお皿からこぼれてしまいそうな、豪華でポリウームのある食事が並んでいる。どれを見ても、料理長の気合度が半端ではないことを主張していた。

キラキラと光を反射する、装飾された空席が物淋しげなのは、きつと錯覚だ。ヴァレンクは自分にそう言い聞かせ、椅子の隣で止ま

る。

明らかに避けているにも関わらず、イリヤは「そうだね、今日は僕が手伝おう」と、抱っこして座らせた。

生まれながら、ヴァレンクには両足が無い。義足を付けようにも子どもは成長が早いいため、すぐに合わなくなる。成人と認められる年齢、十八歳になるまでは車椅子を使うことにしていた。不自由な面もあるが、普通の椅子に移り座るなど彼には容易いことだった。

地味に精神を削る父親の親切心に加え、さきほどから一言も話さない母親が向かいの席にすることも、彼の表情を引きつらせる要因となっている。

様子を見て動かずにいたメシーと、イリヤがそれぞれ席に着いた。

彼らのすぐ横に犬のカイも腰を下ろす。ご馳走を前に、拭いきれないほどの涎よたれを床に垂らすまい、と必死だった。

「さあ、ヴァレンク。君の立志を述べなさい」

新成人の丁度半分、つまり九歳の誕生日は特別視されている。家族の前で、将来の目標や志を宣言するのが習わしだ。

「はい。すべての本を読み解くことです」

本当に活字が好きだな、とイリヤは苦笑する。そうさせてしまったのは今の環境のせいでもあり、幾分申し訳なく思った。

子どもを作るときは、母体を介さないのが一般的となっている。

まず父母の精子と卵子を採取し、培養液中で受精させる。これを媒精というが、その媒精した複数の受精卵から、優秀な遺伝子を持つものを選別する。そして、羊水と成分が同じ培養液で満たされた専用の保育器に移し変え、体が丈夫になるまで育むのである。

しかし稀に、自分で産みたいと申し出る母親もいるのが現状だ。少数派の彼女たちにとって情報や設備は世の中に乏しく、細々とでも最低限のものが揃う病院は救いであつた。そこはもとと小児科だつたが、先代から受け継がれた際に産婦人科も設立された。困っている人たちを助けたい気持ちと、マイナー好きの精神が実現を可能にしたのだ。

その病院の後継者というのがイリヤだつた。動機はさておき、彼は、仕事に対しては真面目な男である。

人類が人工授精に頼りきつた時代が続き、使わなくなった子宮は退化し始めている。イリヤは、生命の有難みが失われたように感じた。そしてそれが当たり前だと豪語する世界に、自分が存在する虚しさを覚えた。

三十路を目前にしたある日、大病院との合併が半ば強制的に決まつた。腕を見込んで、とのことだつたが、結局はイメージアップが狙いなのだ。実際、本当の専門である小児科の仕事はほとんど回つてこず、患者のいない日が続いても産婦人科を担当させられていた。

——懐は以前より温かい。心は寒いが。

辟易したイリヤの内心では、くだらないことばかり浮かぶ。

看護師は他の科と兼任しており、助産師は出産間近の妊婦がいる

ときだけ病院に来る。故に、仕事場には常任している彼一人しかないことが多い。それもまた辛かった。

暇を持て余し、いつものようにマイナーな物事の研究をしていると、女性が人目を気にしながら診察室にやって来た。顔を隠すような身装だったが、イリヤには見覚えがあった。

——彼女は副院長の娘で、名はエリヴィラといったか。病院外で遠目に見たことはあるが、直接会うのは初めてだ。しかし、このような場所に訪れるとは思いもしなかった。

「私のこと、ご存知なんですネ」

記憶を探る様子に気づき、エリヴィラは言葉を零した。確かめるような口調でもなく、本人すら気づかないほど自然に口から出た感じであった。

「早朝、あなたをザリエーシェ公園でお見かけしたことが何度かあります」

「え？」

「僕も時々、あそこを散歩してるんですよ」

予想だにしない情報をどう扱えばよいのかと、エリヴィラは混乱した。

その後イリヤは、求めてもないのに世間話を滔々と続けた。よほど人に飢えているらしい。あるいは彼女が、話したくなるオーラでも持っていたのだろうか。

他愛の無い会話によって心がほぐれた様子のエリヴィラは、一呼吸置いて本題へ移った。

「私が妊娠しているか、調べて頂けますか？」

ここに来ることの意味。それはイリヤも勘付いていた。しかし彼女の表情は、普段なら祝福されることが絶望の材料になりえる、そう物語っていた。

本来ならば前もって何度か通院してもらい、出産できる体を作ってから受精卵を着床させる。そのままでは母子ともに多大なリスクを背負うからだ。

しかし検査の結果、彼女、エリヴィラからは治療の痕跡がみられなかった。ごく一般的で準備が不十分な体に、小さな命は宿っていた。

「妊娠、五週目です」

いつも笑顔で贈る「おめでとうございます」が言えなかった。とても言える雰囲気ではなかったのだ。イリヤの言葉を受け、エリヴィラは目を伏せた。

望まれない命。不憫と思うのは浅はかかもしれない。無責任と思われるかもしれない。が、こと子どもに関しては感情移入してしまう彼は、中絶の道など彼女の前に晒したくなかった。それでも医者として、選択肢を隠すわけにはいかないだろう。

「産みたくなければ、子どもを堕ろすことも出来ます」

「……それは、この子を処分する、ということでしょうか」

「そうなります」

淡々と言つてのけるイリヤを令、エリヴィラはどう捉えているのか。瞳は目蓋の奥に追いやられ、彼女の気持ちを知ることが困難だ。ただ、左手は優しくお腹に当てられていた。

知識や経験が浅くとも、感覚的にショックを受けることがある。彼女の場合、動物の母親としての本能が、理性に強く訴えかけているのだらう。

答えを焦る必要は無い、一週間ほどじっくり考えてみてはどうか。そう言おうとイリヤは口を開く。しかしそれは一瞬遅く、代わりに凜としたエリヴィラの声が空気を震わす。

「産ませてください」

真っ直ぐに見据えるその眼に迷いは見受けられない。イリヤはそれを、驚嘆と畏敬の眼差しで見つめ返していた。

なぜ、この短い時間で決意できるのか。

なぜ、この胸は高鳴るのか。

答えは当然、迷走することになるだらう。

技術というのは、発展すればするほど廃れた後に解明が難しくなる。今の世の人間が存在し得ない大昔に、高度に発展していたもの

もあつたはずだ。しかし現代において、失われた技術に関する情報は非常に少ない。出来ることといえば推測くらいである。

産婦人科は世から消えたと言っても過言ではない。そもそも認知度は低いし、知ったところで苦痛を伴う方法など敬遠される。楽なもの当たり前前に喜ばれるのだ。

僅かばかりの知識と推測をもとに、手探りで事に当たらなければならぬが、イリヤにとってそれは醍醐味でもあつた。在り来たりが支配する世界に、真実を見つけることは出来ない。そう考えていた。

小さな子宮が胎児の成長に耐えられず、流産や早産になる可能性は高い。しかし産婦人科には、他の科が用いているような高機能の機械が無いため、詳しい状況は把握できないでいる。院長に進言しても蔑ろにされるだけだった。

慎重に経過を見ながら妊娠二十週目に入った。まだ大きな問題は起きていない。もっとも、心配すべきはこれからかもしれないが。

通院を繰り返し、イリヤとエリヴィラは互いを知るようになった。価値観が合致し自らのことを話すようになったからだ。

エリヴィラは病院の副院長でもある父親に、自分が妊娠していることを告白したらしい。最初こそ認めようとしなかった彼だが、イリヤと病院内で偶然すれ違った際「娘をよろしく頼む」と言つて去つて行つた。彼女が毎日、お腹の子どもの様子や自身の心と体の変化を、彼に話して聞かせた結果だった。それ以上に、イリヤという男の人柄に感化された部分もあつたのだろう。

早産することなく三十九週目に入り、イリヤは安堵の中に一抹の憂慮を感じた。しかし、深く追求はしなかった。

そして待望の日が訪れる。

分娩室から、想像を絶する苦しみの叫びが漏れてきた。大きめの総合病院といっても、けち臭い院長の方針によって、産婦人科に与えられた空間は小ぢんまりとしている。そのため、お産時の声はどうしても周囲に聞こえてしまうのである。

一時間もすると、今度は元気な赤ちゃんの泣き声を耳にした。驚くほどの安産だったらしい。しばらく経って、イリヤが様子を見に来た。

「次は君の番だよ、エリヴィラ」

分娩台は一台しか無い。出産日が重なれば、どちらか片方は待たなければならぬのだ。しかしその間、あの断末魔を聞きながら陣痛に耐えることになる。そして、彼女も例に外れず不安な表情を顕わにしていた。

先に出産した女性は直前まで同じ部屋にいた。二人部屋の陣痛室である。彼女が妊娠したのはエリヴィラよりも遅く、早産ではあるがほぼ治療不用の赤ちゃんを産んだ。不利な条件を抱えるエリヴィラは、強いプレッシャーを感じながらも痛みに耐えた。

産後は同じ部屋に戻って来る。ベッドを置ける部屋がその一室しなく、陣痛室と回復室とを兼ねていたからである。

再び隣り合い、お産を終えた彼女が話しかけてきた。尋常ではな

い痛みに呻き、苦悶するエリヴィラを励ましたかったのだろう。

「男はね、陣痛の痛みには耐えられなくて死んじゃうらしいわ。だから、これは女にしか出来ない仕事なのよ」

全部機械任せなんて冷たすぎる。そう言う彼女もまた、今の世のあり方を解せないでいる一人だった。

男に子どもを産む機能は無い。陣痛で死ぬというのは眉唾物に近い想像である。しかし、根拠の無いものを信じる力は誰にでも備わっているはずだ。それも、余裕の無い時は特に発揮されやすい。

「それじゃ、体外受精に頼るのは男が妊娠したら死ぬからなのね」

信じるのは良いが、信じ込むのは危険でもある。

二時間もしないうちにエリヴィラは分娩室へ入った。いよいよ苦痛から解放される。そう思うと、別の感情が湧いてきた。早く我が子に会いたい。いきむ間に浮かぶのはそれだけだった。

産道から頭が出て、肩も片方ずつ抜け、長く時間はかかったが順調に事が運んでいた。助産師は赤ちゃんの頭に手を当て支える。

最後のひと踏ん張りと同時に、すべてが外に出た。一瞬の間と、混乱がその場にいる人間を凍りつかせる。その赤ちゃんは、胴体から下が無かったのだ。まるで足だけを母体に置いて来たかのように。

静まる空気を不審に思ったエリヴィラは、息も絶え絶えにどうしたのかと問いかけた。助産師が遠慮がちに、抱きかかえている赤ちゃんとは対面させた。嬉しさに顔を綻ばせるが、口から発せられたの

は絶叫だった。

現在に至るまで四百年以上、手足が欠損した状態で生まれた事例は無かった。しかも、それ以前の時代は体外受精での子作りが盛んであり、自主的に出産を希望する者は誰一人いなかったという。

このような事實は、医者のような専門の人間くらいしか知らない。あるいは、都市伝説化した話が、物好きな一般人の耳に届いている可能性もあるが、エリヴィラはそのどちらにも当てはまらない。医者者の娘といえど、就いた職は医者ではないのだ。

きつと君のために、君の負担を軽くするために、あの子自身が選んだんだよ。足を諦めることを。

——そんな慰めはいらない。

僕と一緒に育てる。あの子の父親になる。文献に、車椅子つていうのがあるんだ。工作は苦手だけど、完成させてみせるよ。

——私には育てられない。あんな異質な……っ！

エリヴィラ！ 我慢しないでいい、吐いた方が楽になるから。

認知したものが「理解できないもの」であつたとき、それは「忌むべき対象」として目に映る。

既成概念から外れたものを認識するには経験が必要だ。しかし『経験は最良の教師である』が『授業料が高すぎる』ため、辞する者も少なからずいる。つまり『経験』とは、一度に濃密な衝撃を与えることで概念形成への道を昇華させ、それに比例した大きな代償――

―「悲劇」を要求する悪魔的な啓示とも言えるだろう。

+ + ○ + 8 + ∞ + 8 + ○ + +

己を抱く骨ばった手が気に入らないのか、赤ちゃんはぐずり泣いた。初老の男は顔色を変えないものの、あやす手の動きだけはぎこちなく慌てている。性格と心情とのミスマッチが滑稽さを浮き彫りにしたようだ。

「……怖いですよ、副院長」

ああ、今ので眉間にしわが寄ってしまったと、薄っすら冷汗をかきながらイリヤは自分の口を呪った。だが、喜劇から現実へ飛び出して来たような不自然な光景を目撃して、口を出さずに済ませてしまえる人がいるのかと疑問に思う。

今や大声で泣き喚くそれは武骨な腕を離れ華奢な腕の中に収まると、途端にピタリと静かになった。イリヤは苦笑いで男を見る。表情が読めないのは相変わらずだったが、妙な敗北感と戦いげんなりしている姿は、数本ある白髪を目立たせていた。

「絶対安静につき面会謝絶」と銘打ち、遠回しに孫と会いたい旨を示す副院長を退けて、およそ三ヶ月が経つ。院内では、彼の体重が二、三キロ減ったという噂が流れた。意地悪く無計画にとった対処ではなく、エリヴィラの要望に応えるためにも必要な期間だった。

あの後、少し落ち着きを取り戻した彼女は言った。誰にも存在を知られたくない、と。イリヤに「ヴァレンク」と名付けられた、幼すぎる我が子が世間の、家族の好奇心な目に晒され、それが自分にも向けられることが怖いのだと。

平和に満ち満ちた時代が悪い。変化を拒み進化を阻んだ安定が悪い。何より、多くの知識を過去に捨て去った人間が悪い。そう、言葉では何とでも言える。本当は誰も、何も、断言など出来ないのに。

——君が望むなら。

イリヤは決心した。

長年かけて手に入れた悪魔の卵。孵化させて、ヴァレンクの身代わりとしよう。

悪魔は人が手を加えなければ生まれて来ない。ダイヤよりも硬い、特殊な構造をした卵の中に閉じ込められており、それは「解放の儀式」と呼ばれる行為によって割れる物質へ変化する。

方法が編み出されたのは数百年昔だが、広く知れ渡ることとはなかった。悪魔の存在自体が闇裏ものであり、情報を所持する団体も、力を誇示するためか外部に漏れる恐れを徹底的に排除したからである。故に、悪魔の解放はその団体に依頼せねばならない。

しかしイリヤは一人で儀式を行った。必要な物、言葉、行動を知り、すべてを揃えることが出来た。親族のほとんどが団体の関係者で、彼は正式な会員ではないが家柄と人柄が周囲の信頼を固め、情報交換するまでに至った。マイナー研究に、悪魔という項目も含まれていたのだ。

生まれてまもなく、悪魔は生物の形容を象り始める。そして、個体差はあるが三ヶ月を過ぎたあたりから、見た目では判別が出来ないようになる。唯一、体に残る証拠と言え、どこかに刻まれる購入店のマークや日付だ。悪魔の卵を扱う店は予め、解放の儀式を行った際それが浮かび上がるよう、仕込む義務があった。

今、イリヤの腕の中で眠る悪魔に刻まれていないのは、規則にのっとり店で買ったわけではないからだ。安価で手に入れるために講じた策と苦労した日々が思い出される。イリヤは生まれて初めて、自分が金持ちでないことに感謝した。もしも目立つ所に刻まれてしまっていたら、悪魔について疎い者ですら訝しんでいただろう。

「わしは仕事に戻る。世話になった」

「いえ、これからも頼りにして頂ければ嬉しいです」

副院長はいつも言葉が足りない。彼の言う「世話になった」に主語を付けるなら、「娘と孫が」だ。ここ数ヶ月のやりとりで、やつと彼のことを理解し始めたイリヤであるが、小声で呟いた「黒いうちに跡継ぎが生まれて良かった」という言葉には、つい「髪が」ですか？」と口を開きそうになった。

悪魔であるメシーをヴァレンクと偽って以来、嘘と隠し事で塗り固めた生活が続いた。

「表向き」のヴァレンクは親族に会い、街を歩き、礼儀作法を身につけ、さも本人であるかのように名乗り振舞った。性別が女だという枷はイリヤの神経をすり減らす。しかし、こればかりは選ぶことが出来ない。

メシーとは対照的に、ヴァレンク的生活範囲は家の中に限られた。外に出てはいけない理由が、自分の体に起因すると気づいた時期は曖昧で、彼はいつのまにか「どうして？」と問わなくなっていた。現実を押し殺すように本の世界を迷い歩き、無理矢理にでも狭い居場所を踏み固めて広げるために、様々なジャンルのものを手に取り読んだ。九歳の誕生日を迎えた今日も、祝いの席へ呼ばれるまでイリヤの集めた専門書や古書などにのめり込んでいた。多くはまだ子どもには早い内容である。が、彼は苦痛を感じたことはなかった。

「お昼に誕生日会なんて珍しいね」

家族の前では不満や文句を殊更に控えるヴァレンク。疑問の示唆は、そんな彼の数少ない感情表現だ。

「やっぱりそう思うかい？」

「物語とか歴史書に出てくる特別なイベントって、だいたい夜に盛り上がってたから」

「……今日に限って夜に仕事が入ってね」

「ぼくは父さんの仕事を尊敬してるよ。神の御業じゃ、ぼくは生まれてなかった」

「ありがとぅ。でも、今回ののは病院じゃなくて、その協会からの依頼なんだ」

——デミウルゴス協会。

二千年も前から存在し続けていると言われる、バイオテクノロジーの集大成を担う団体である。一般には子どもを授かるときに利用する所として、広く認知されている。彼らの大半は、生命の創造が可能なのはデミウルゴス協会だけだと信じ、それを『神の御業』と呼ぶ。信仰が崩れることを恐れ、妊娠・出産のことは明るみに出ないよう管理されていることも影響していた。

しかし、イリヤが携わる協会の仕事はヴァレンクが思っているような、「生命の創造」ではなかった。彼が請け負うのは、悪魔に関するものである。

デミウルゴス協会の中でも、極秘中の極秘として異様な雰囲気を放ち、選ばれた人間のみが従事することを許される。いわゆる裏の顔だ。その一端にイリヤは属していた。協会の会員でさえ、当事者でなければ活動内容を把握することは叶わない。

親や協会の知人から、入会をしつこく迫られても断っていたイリヤだが、三年前、両親が亡くなったことをきっかけに踏ん切りをつけ、正式な会員となった。情報を得る最大の手段として親族を頼り、今まで綱を渡って来た。途絶えた繋がりのはじめは、自分で掴み取るしかなかった。

「ご馳走様。……私、部屋に戻るわね」

出された料理は綺麗に食べ尽くされている。今日は特別だからと奮発してそこそこに有名な店の料理長を家に招き、作ってもらっていた。

イリヤは、食べ残しをしないことには律儀だと思っ反面、途中退席なんて失礼だと彼女を引き止めたかった。しかし結局、言えたの

は「ああ」という気の抜けた言葉だけだった。情けないと思いつつ、姿がドアの向こう側へ消えるまで、いや消えても、しばらくは彼女を目で追うことしか出来ない。

もともと気は強い娘だ。責任感もある。そうでなければ、今ごろ行方をくらませていただろう。エリヴィラは息子にまったく愛情を感じていないわけではなく、どう接して良いかが分からなかった。言葉をかけようにも、逆にそれで傷つくかもしれないと口籠もり、手を差し伸べようと近づけば彼の体が目に映り尻込む。その言動が悪循環を生み、彼女は「避ける」という行動しか取れなくなっていたのだ。

「二人ともすまないね」

彼もまた、責任感が強い。他人の命を預かる医者の仕事をしているのだから、当然と言えばそれまでだ。病院の人間が全員、人情味があればの話だが。

「父さんのせいじゃないよ」

悪いのは自分の体だ。そう思うも、一瞬だけ恨みの念が通り過ぎる。ヴァレンクはそれを、言葉には出来なかった。

「父さんはいつも優しいし、カイだってぼくに懐いてくれてる。何より、本を読んだときが一番楽しい。だから、母さん一人に嫌われても平気だよ」

心に言い聞かせないと簡単に折れてしまう。イリヤも、ヴァレンク本人も、この仮初めを無理に納得する。穏やかな関係を壊さないように。これ以上、悪化しないように。互いの本心に触れてはなら

ないのだ。

それよりも、ヴァレンクには気になることがある。メシーが自分を凝視している。口をもぐもぐと動かしながら。視界の中で存在感を消していたはずの、彼女の視線が痛かった。むしろ今は気になり過ぎて、見ないことの方が辛い。

「……何？ メシー」

僅かに彼女の方を向き、ヴァレンクは問いかける。

「わたしは、ヴァレンク様のどこにいますか？」

——何だ、この唐突な難問は。

お父上、カイ、本、お母上。指折り数えるメシーの姿は、人間の子どもにしか見えない。ちらり、と言葉に詰まるヴァレンクを再び目に捕らえる。

「わたしはどこにもいないのですか？」

——どこにもいない。

思わず、顔をしかめた。

「いるよ。……どこかは分からないけど」

怒りか、嫉妬か、それとも別の感情か。現時点ではメシーに対する気持ちが見えぬ。ただ確実に言えることは、座って話してそれを認識している自分がいるということだ。ヴァレンクの心に露^{もや}

がかかっていようと、存在自体が消えたりはしない。

そうだ、みんな家族だからね！ イリヤは楽しそうに笑った。しんみりとした空気も一転し、皿の上も軽くなった。カイは、嬉しそうに尻尾を振っている。

02 「知らない」に「かど」はたつ

勉強が出来て、運動も出来て、それなのに少し常識が足りない。とぼけた顔と物腰の柔らかさは、男女問わず年上からも可愛がられる。

——気に食わない。あいつの何もかもが。

「ボクも学年トップなのに」

「すねるなよ、ルスラン。学年ドベの、このオレが頭なでてやっから」

「すねてないしつ、頭をなでるな！」

わしゃわしゃと髪を掻き乱す同級生の手を払い、距離を取る。睨みを利かせながら、手櫛で髪型を整える彼に、ウラジーミル・バラノフは言う。

「……おまえ、女みてえ」

まだ八歳の額に青筋が立った。

「ヴオーヴァー！ 人が気にしてることを臆面もなく言うな！」

言い合いをしていても、愛称で呼ぶことから二人の仲の良さが窺える。たとえ「『おくめん』ってなに？」との返事にルスランが激怒しても、犬猿の仲というわけではない。

「やっぱさ、しんせきつて似るもんなんだなあ」

腕を組み、しみじみと頷く。争う気さえ失ったルスランはそっぽを向いた。

彼には一つ上の学年に親戚がいる。父方の姉の息子、ヴァレンクだ。医者である共通の祖父、ボリス・ラストルグエフに溺愛され、全財産を相続する権利を与えられていた。いつも眠たそうな顔をしており、笑ったところを見た人はいないのだが、その独特な雰囲気と言動には周囲を和ませる作用があるらしい。

一方、ルスランの父親とボリスは折り合いが悪く、一時期、絶縁状態にあった。それが五年前、相続の件をどこからか聞き付け、怒り心頭に発して抗議に現れたのだ。ボリスにほとんど相手にされなかった屈辱は息子、ルスランの深層心理にも多少の影響を及ぼした。

共通して言えることは、顔や仕草に女っぽさが出てしまうということだ。性差が顕著になる年頃でもないため余計に違和感が逃げてゆく。加えて彼らはそれぞれの学年トップだ。似てると言われても仕方がない。——ルスランはそれが嫌だった。

祖父と同じく、父親は医者職に就いている。現代での治療は八割がた機械が行うため、操作方法と、ある程度の専門知識を学んでいれば、医者への就職はそう難しくない。ただ、医療関係の仕事を金儲けの手段と考える者が多かった。その思想に、父親も染まっていた。ルスランは医者を目指すことを強いられ、ボリスに気に入られるよう努力すると、洗脳かと思われるほどの厳しい教育を受けて来た。過大な期待を小さな背に、彼は優等生の肩書きを手中に維持するため刻苦を惜しなかった。

「『頑張れば報われる』なんて、誰が言い出したんだ……」

「なに？ オレの話？」

「違う！」

単語を音にするだけで頭痛が起きそうだ。ルスランは、全身にドクドクと血が駆け巡る感覚を、しばらくの間、味わうこととなった。

彼はつい最近、両親に連れられヴァレンクの誕生日会に参加していた。正確な表現を求めるなら「押しかけた」だろうか。特別な日に親族が集まること自体はよくあるが、彼らの場合、「祝う」よりも「ご機嫌取り」が目的であった。もちろん、ボリスが参加していたが故の行動である。

そのとき交わされた、祖父ボリスと義叔父イリヤの会話は、ルスランの脳裏に焼きつけられていた。

「明敏で礼儀正しいな。申し分ない」

自分のことかと思っでしまい、ドキリとした。

「あの、僕は、跡を継がせるためにヴァレンクを育てているわけじゃ……それに、医者を目指すかの判断は、本人の意思を尊重してあげてください」

媚びるでもなく、医者になるでもなく、ボリスの絶大な好意を獲得することが出来るのはなぜなのか。ルスランは理不尽しか感じなかった。無視を決め込んだボリスを振り向かせようと、己の両親は必要以上に自分を売り込んでいる。やはり、疑問だけが浮かんた。

最終的には邪険にされ、早々と追い払われた。それを納得する理性よりも、認めてもらえないことに対する業腹が勝り、日増しにヴァレンクへの意識を強めていった。

——優秀でいることに意味があるのか。

そんな片隅の自問など悔しさが蓋をする。絶対、負けたくない。何でもいいから、彼に勝りたい。焦燥感にも似た熱意は全身を奮い立たせていた。

「そんなに熱くなるなって。な？」

「誰のせいだと思ってるんだ！」

「えーと……火の精？」

「ヴォーヴァ！」

「あ、じゃあ気のせい……とか」

この後、彼の前に子鬼が現れたということは言うまでもない。

+ + ○ + 8 + ∞ + 8 + ○ + +

薄暗くて陰気な家だ。日の射す時間帯であっても、人の気配はな

いだろう。

「ただいま帰りました」

毎日、録音された独り言を再生するように、決まった挨拶を繰り返す。当然だが返事はない。

ひんやりした空気が孤独を自覚させる。マヒした人間にとっては無意味な感覚であるが。日常として受け入れて暮らすことが、最善の選択だった。

「……そうだよ。気づかなきゃ楽しかったんだ」

明かりも灯さないまま奥の部屋へ辿り着く。客人の視野に入りそうな場所は、つまらない見栄がチラついて気分を害すからだ。まるで、自分もその一部だと思えてくる。

金に糸目を付けず、見て呉れだけの上流階級を楽しむために買い集められた品々が、傲慢な錯覚に落とそうと唆す。どろどろとした気味の悪い価値観を植えつけるための甘い罠なのだろうか。もしくは、「家具と同様」ではなく「金を生産するための道具」にしようとしているのかもしれない。

高級品を買い漁るのは母親の道楽である。甚だしく金遣いが荒いのだ。夕方を過ぎても未だ帰って来ていない理由はそこにあった。

学校の騒がしさに比例して増幅する静寂。充実すればするほど、逆に一人であるときの虚無感が自律を崩そうともがく。家において、両親について、幸せに感じたことはなかった。

「宿題、明日でいいや」

勉強に集中すれば、嫌なことを考えなくて済む。文章を読んだり単純計算をして、気を紛らわせたかった。ところが、椅子に手をかけるとその気も霧散した。机上に広げられた文房具を放り、ベッドに寝転がる。溶けてゆく現実を噛み締めながら眠りに落ちていった。

温かく、柔らかい。満たされる心地良さだ。

聞こえてくる子守唄には覚えがある。

——ここにいる子は、普通、なのよね……。

誰だろう。知らない人ではない気がする。

——ルスランは寝たか？

——そうみたいよ。

あれ？ お父さんとお母さんの声だ。

「それより。例の件、どうなったの」

「ああ。……週末か、来週の頭くらいになりそうだと。まったく、かなりの出費だよ。奴ら、足元を見やがって」

「やるなら早くやって欲しいわ。貴方も、へっぴり腰だからお金をふんだくられるのよ」

「ああ、すまん」

仕事の話か。きつと何も教えてくれないんだろうな。

遠ざかる二人の声を振り切るように、寝返りを打った。

+ + ○ + 8 + ∞ + 8 + ○ + +

朝早く起きて、宿題と入浴を済ませた。昨日の夜のことはあまり頭に残っていない待つご飯を平らげ、洗面所で鏡と対面する。ふと、友人の言葉を思い出した。——おまえ、女みてえ。

「……ただの身だしなみだっ」

いつもより若干、粗めに髪を梳かす。朝からキレ気味になるのは久しぶりだった。

両親はすでに家を出ているが、心に動揺はない。いても窮屈なだけだ。夫婦喧嘩はしないものの、父親の命令口調と母親の猫撫で声には耐え難いものがある。

外は快晴で、引きずっていた重りも切れたように気分が軽い。別世界にすら思えた。それくらい清々しかった。そう、清々しかったのだが。

「よっ、ルスラン」

「何でいるんだヴォーヴァ。いつもみたいに遅れて来い！」

遅刻の常習者が待ち構えていた。ウラジールは悪びれもなく返答する。

「いやぁオヤジとケンカしちまってさ」

飯も食わずに出て来たんだ、と言う彼は快活であった。

爽やかに登校する機会を失ったルスランは、仏頂面でウラジールの一步前を歩く。後ろで音痴を披露している彼より歩幅が狭いせいで、忙しく足を動かした。それでも姿勢の良さを保っていていられるのは癖なのか、意地なのか。判断が出来る人はいない。

活発さに調子を狂わされると、落ち着きを取り戻したときに疲労が倍になって襲って来る。なるべくクールを装いたいルスランだが、彼が絶好のタイミングで、ことごとく邪魔するのだった。そして図らずも引き出された自分の素を、潔く受け止められず突き放すことで、さらに労力を消耗する。

しかし煩わしいものは疎まれるのが常であるが、急に消えると不安にもなる。

「何でいないっ！」

いつのまにかウラジールは別の道へ入っていた。迷うことなく踵を返すルスランの心には、彼が友人として映っているのだろう。心配する素振りは見せなくとも、咄嗟の行動にそれは反映されている。

二本目の横道に人影があつた。曲がり角の手前で立ち止まり、動きそうにない。声をかけようと思ひ近寄ると、拳に力を込め震えていることに気がついた。普段とは違ふ気配に戸惑いながらも、ルランは平然とした態度で接した。

「通学路から外れてるぞ！」

ぴくつ。体が揺れた。

刺激を受けて膨張していたハリセンボンが萎むように、肩の力を抜いたウラジーミルは、先ほどよりも一回り小さく見えた。息を少し長めに吐き、硬直した筋肉を和らげたからだろう。

「わりい！ でも近道なんだぜ、ここ」

笑顔で振り向き、彼はそう言った。最初に「いつも通り」を望んだのはルラン自身であつたが、相手に便乗され、結果的に隠し事をする余地を与える形となつた。逆に問ひかける余地を潰そうと、ウラジーミルは話題を二転三転させる。それも不自然なほどに。何があつたのかは触れない。そのことに對し、じわじわと反感の意が込み上げる。そして学校に着くころには相槌さえも億劫になつていた。

授業に身が入らず、失敗を重ねる。些細なことではあつたが、完璧を貫くルランの不調は周りからすれば一大事だつた。ある先生は病氣ではないかと青い顔をし、同級生は口を揃えて休めと言つては率先して雑事を攫つてゆく。割合で言えば圧倒的に女子が多かつたが。

浮き立つかと思われた気分は、呆然とする脳の処理作業に神経が

集中し、それどころではなかった。休養という名目で無人島に連れて来られ、置き去りにされたかのようだ。よって、何をして時間を過ごせば良いのか分らない。放課後になって、何もすることがないルスランは、本格的に悩みだした。家には戻りたくないのだ。だが学校に居座れば、確実に追い払われるだろう。過剰に心配する人たちの善意で。

足取り重く校門を踏み越え、「お大事にねー」と軽く手を振られる。気だるさに溜息をつきつつ、元凶の友人を思った。

休み時間には誰かを探しに飛び出し、様子を窺えば眉を吊り上げて宙を睨んでいた。そして学校が終わると、慌ただしく帰り支度をして走って消えてしまった。明らかに変であり心配すべきは彼だったはずだ。それなのに、氣遣われるのが自分だけというのが気持ち悪く感じられた。

日が沈むまでの時間、ルスランは散歩でもしようとザリエーシェ公園に来た。遊具や砂場はもちろん、池、噴水、広場などがあり、大人でも訪れる憩いのある場所だ。家や学校からは程良く離れている。

人工的に植えられた木々の木漏れ日を浴び、ゆっくり足を前に出す。ざっと見渡しても人はまばらだった。噴水の前でイチヤついている恋人たちを目にしたときは、さすがに歩みを速めた。

公園内の高台は、街を一望とまではいかないが、それなりの高さがあった。塗装の剥げかかった、ラクダ型の屋根が付いたベンチはいびきをかいて寝るふくよかな体型の男に占拠されていた。くすんだ黄金色のラクダは首をよじり、殺伐とした半目で眼下を眺めているようだった。

回れ右をして坂を下る。影が細長く平地に向かって伸びていた。

上るときには気付かなかった脇道が、無性に心を引き寄せた。

さわさわと、風は枝葉を揺すり、隙間に張られた巢の主であるクモは振動に耐え忍ぶ。まだ空は青い。ルスランは吸い込まれるように奥へ進んだ。

普段は使われていないらしく、伸びきった草木が侵入を阻む。狭い通路は上り坂で、両手を駆使して掻き分けた。直感的に、その先が己の行く末だと想像した。

赤みがかった空を仰ぐと一番星が輝いていた。澄みきった空気を肺に滑らせ、緩やかに吐き出す。違う世界に来てしまったのか。それとも自分が別人になったのだろうか。神妙で開放的な気持ちになっていた。

行き着いた場所は墓地だった。公園の近くにあったとは、ルスランにとって初耳だ。もっとも、公園自体に来るのも二桁に及ばない。今更ながら、なぜ来なかったのかと不思議に思った。

上って来たのだから、ここも高台と同じように景色が見えるはず、と手すりのある方へ歩く。案の定、生い茂る藪の間から例の、ラクダのお尻がこちらを向いていた。いや、町並みが見えた。素晴らしいと賛美するほどのものでもなかったが、何もかも忘れて呆けるには打ってつけかもしれない。

ざわざわと、再び風が枝葉を弄ぶ。

自然の音に混ざり、人の声が聞こえる。女の子の泣く声だ。通っ

て来た道が手入れされていなかったで、必然的に、誰もいないと頭が勝手に解釈していた。気づかれてはいないものの、ファンタジックな世界に浸る、数秒前の自分が恥ずかしかった。

太陽を背け、墓前に膝を折ってうずくまる同年代の少女に、ルスランは遠慮もなしに話しかけた。

「ラリツサ、だよな。よく学校を休んでる。何か……」

何かあったのか。

言い終わる前に彼女は遮った。

「な、何でもないよ！ 気にしないで」

あまりの驚きに言葉をどもらせ、わたわたと涙を拭う。こうして対峙し、はつきり認識したものを忘れるとは、無茶なお願いではないか。ルスランは何度目かの既視感に眉をひそめた。それでも、怯えるような表情をされたら黙る他ない。

「ルスラン君はどうしてここに？」

「……夕日を見に。高台は落ち着かないし」

いろいろな意味で。だが冒険心をくすぐられて来たなど、恥ずかしくて口が裂けても言えなかった。

「そうかな。でもラクダちゃんはかわいいよね」

「え、そう……かな」

肯定すべきなのか。問いを視線で投げかけるように、かのお尻を見つめた。硬くて張りのあるそれは黒ずみを主張するだけで、何も語りはしなかった。

世界が赤みを増し、物質を照らす。どこまでも伸びる影を追いつながら、二人は帰宅することにした。当然のごとく、ルスランは茂みへ向かう。

「帰り道、こつちだよ？」

彼女の指差すその先に、舗装された広い道が下方に続いていた。どうやら、普段というより誰も使っていなかった所を抜けて、ここに来たらしい。今が夕方で良かったと、ラリッサの後ろについて帰るルスランだった。

二度寝、三度寝は心地良い。故に、皆勤賞を誇る彼が遅刻をして
も仕方がないことだろう。

起床後いつもの流れで支度を済ませるルスランは、食事中、何の
気なしに時計を見た。母親の趣味が丸出しの、装飾が凝った壁掛け
時計である。さり気なく施された、若々しい四葉に絡みつく螺旋状
の蛇——「蛇四葉」というデザインは、デミウルゴス協会のシンボ
ルマークだ。これはこの時計に限らず至る所で目にする。

チツ、チツ、チツ。針が鳴る。

時の流れは静かだ。

減速してまったりする空間。

その柔らかな変化に安心させられる。

はたと、指し示された時間に瞠目した。

「……何で！」

何でいつもと時間が違うのか。

それはルスランが寝坊したからである。

食器は流しに置き去って、歯と顔だけを急いで洗う。玄関のドア
が開閉されるころ、家の中には時計が奏でるロマンチックな曲が響

いていた。

「そうだ、近道！」

通り過ぎた数歩を、遅刻魔に教わった最短距離に沿うため後戻りさせた。湾曲した学校への道のりは非正道だと言いたげであったが構わずに走る。うらぶれた路地裏を突き進み、捨てられている機械仕掛けの人形を尻目に角を曲がった。

そろそろ目的地も近い。と思うよりも前に、家三軒分ほど先を歩く少女が思考を独占した。

「ラリッサ？」

「……え、ルスラン君？」

息を切らせているルスランとは裏腹に、ラリッサはゆっくりと、諦念とともに遊歩していた。彼女の周りだけが、他の移ろいを見送る空間となつて取り残されているようだった。

「ほら、行くぞ！」

早くしないと遅れてしまう。しかし放って行くわけにもいかない。「でも、わたし……」と言い淀むラリッサの腕を掴み、ルスランはまた駆け出した。

「が、学校、逆！」

「えっ？」

正しい方向に導かれながら。

荒々しく呼吸し、汗をかく。

幸い、校門の半分はまだ開いていた。仁王立ちする二人の教師の真ん中をすり抜け、一息つくルスランは掴んでいた手を放す。すると、運動が苦手な彼女はその場にへたり込んでしまった。間に合ったは良いが、何も自分のペースに巻き込む必要はなかったのではと罪悪感を覚えた。

息が整い教室へ歩き出すと同時に門が閉まる。初めて聞く重い音だった。

「どうしたのルスランくん！」

「心配してたのよ！」

「休みじゃなくてよかったあ！」

「ラリッサもいつしよなんだ」

困う女生徒たちを軽くあしらい、押し退けるように中へ入った。事情を知りたがるのは男子も同じで、先生が来て着席を命じるまで追及の嵐が去ることはなかった。

「あれ、ヴォーヴアは？」

今ではすっかり自席に整列した群がりに空きは目立つ。今日は遅刻なのかと隣の男の子に確認をした。

「さあ？ そっぴや見てねえな」

彼の口振りは至極、興味無さげであつた。

厚めの雲が大地に陰りを落し、お昼の休み時間がもうすぐ終わろうとするころ、ようやくウラジミルは登校して来た。ただし、すり傷の痕や頬に貼られた湿布薬が、寝坊による遅刻ではないことを証明していた。

さすがに哀れと思える姿だつたのだろう、珍しくも注目されている。なぜそんな痛ましい格好になり、欠席もせず現れたのか。それを詮索する野次馬に対して彼は、ぶつけた所が腫れて引かなかった、それでも精勤賞は欲しいから休みたくはない、などと思い通りに動かない表情筋を使って笑顔を作る。今まで何でもそれでやり過ごして来たのだろうという気がして、ルスランの胸の内にはもやもやがくすぶつた。

「ケンカの相手は誰なんだ、ヴォーヴァ」

放課を待ち、ウラジミルに浴びせたのは怒気を含んだぶつきらばうな物言いだつた。すでに昼間の喧騒は突風のごとく、影響だけを残して消えていた。本当に、子どもの熱は冷め易いものだ。今を以て痛感する彼は、のそのそと椅子から立ち上がりながら、長い息を吐く。

「だれだつていいだろー」

「……ケンカしたことは認めるんだな。しかも親父さんじゃないだろ」

「なんで分かるんだよ！ おまえホントにオレと同年かつ？」

図星を指され、カメのような動きから一転、敏速に突っ込みを入れる。ルスランはそれすらも「当たり前だろ」と打ち負かしてしまう。

はぐらかし方も嘘のつき方も、昔から極端に下手だった。実直な性根は尊重すべきであろうが、なにぶんにも、本人が見え透いた嘘などを押し通そうとするため、その度に苛立ちと戦わねばならない。それ故に鎌をかけたのだ。ウラジールは見事に、「ケンカ」という単語を否定せず、相手を「親父」と明言はしなかった。彼ら親子は頻繁に悶着を起こしているというのに。

「それで、誰なんだ？」

「ルスラン……おまえまで質問攻めするのかよ」

うんざりとした彼が少し、虐げられた犬のように見えた。しかし、気の毒だという思いが、ルスランの良心に働きかけられることはなかった。

+ + ○ + 8 + ∞ + 8 + ○ + +

医療機器の整備を仕事にする父親と口論になった昨日の朝、ウラジールは、「この、ハゲ上がりオヤジ！」という捨て台詞を置き土産に家を出た。ルスランの家の前を横切るとき、丁度ドアが開く

音がし、登校には早くないかと驚きつつ物陰に隠れて待ち伏せをした。

そして彼と一緒に登校をするが、つい、ほぼ毎日のように通る近道に足が向く。一直線に進む友人に対し「学校はこっちだろー」と言いかけ、あ、と自分の方が間違っていることに気付いた。がしがしと頭を掻きながら、彼を追おうと踏み出した足が、止まる。

——なあ、学校の悪魔って知ってるか？

人の話し声が聞こえた。

「数年前にいたらしいんだけどさ、暴力ばっか振るってたって。しかもそいつ、人の腹から生まれたつつー話だぜ」

「げ、同年代じゃなくて良かったなオレら。それ実話？」

「わかんね。んでさ、突然ふくらみだした大人の腹が、実のようにもげて生まれたことから『ハラモゲ』って呼ばれてんだとよ」

「うつわ、気持ちわりい！」

「まあ、全部アナトリーの受け売りなんだけどな」

思わず、拳を握りしめた。知らない話ではなかった。

授業の合間を縫い、『アナトリー』なる人物を探し求めて校内中を駆け回った。朝、噂をしていたのは年上だと判断し、片っ端から——とりあえず目についた背の高い者から順に尋ねる。それが当人にも伝わったらしく、昼休みになると自ら名乗り出て来た。放課後、

あまり人が寄りつかない、学校の裏にある雑木林で話し合うことになった。

「なんでウソのウワサなんか流すんだよ、アナトリー」

「何だっていーだろ。つか年上には敬称つける、クソ赤毛」

彼はウラジミルよりも二歳上の生徒だった。目と眉が吊り上がった表情が基準の顔なのか、終始一貫して崩れない。眉間の溝が深まることはあれど消えることはないようだ。

「……『学校の悪魔』ってやつ、たぶんオレのアニキだ」

確かに、度々暴れては学校に迷惑をかけていたというが、『ハラモゲ』に関しては真っ赤な嘘であると知っていた。ウラジミルは兄が大好きで、彼が誰かに悪く言われると非常に腹が立ち、声を荒げて怒鳴り散らしたくなる。父親との争いも主に、彼への悪口もとれる小言が原因であった。

「ちつ。なら知ってんだろ——そいつが人殺しだってことをよ」

五年前だ。

噛み潰した苦虫を、それこそ呪い苦しめてやろうといううな、おぞましくも静閑な形相で彼は呟く。過去が、現在を蝕んでいた。

当時、ウラジミルは三歳、アナトリーは五歳だった。ウラジミルの兄はすでに学校へ通っていたが、ある日、通り魔に襲われた。そのとき偶然にも保育の施設でお世話になった人と再会しており、彼は庇われて助かった。しかし代わりに、庇ったその女性が命を落

としてしまったのだ。

「アニキがわるいわけじゃない」

悪いのは通り魔だ。

「通り魔から逃げられないくらい弱くて臆病だったんだろつ。暴力しか能のねえ奴が、無駄に守られてんなっつーんだよ！ そんなの殺したも同じだろーが！」

「ちがう！ アニキは、無駄に守られたわけじゃない！」

互いの言葉が互いを激昂させ、理性を失わせてゆく。沸騰しそうなほど熱く煮えたぎる血潮は、どくどくと、体中に青筋を立てた。

「『ハラモゲ』野郎につ、他人の命を犠牲にしてまで生きる価値なんてねえ！」

気づけば、殴りかかっていた。ウラジミルの堪忍袋の緒が切れたのだ。右頬に狙いを定めて勢い良く左拳を振り抜く。が、相手は容易くかわした。空振りに翻弄されるエネルギーは、体ごと前面に打ちつけられる。そこには、アナトリーが背を預けていた厳めしい木があった。拳が右に流れ、左の頬が丈夫な幹に打撲したのだった。

激しい痛みに呻くウラジミルを、彼は鼻で笑って「お家に帰ったら冷やしておけよ、クソ赤毛」と言い置き立ち去る。その背中に、
「明日もここに来いよ、アナトリー！」と叫んだ。

+ + ○ + 8 + ∞ + 8 + ○ + +

「ケガは自業自得か」

心配して損をした。

「ルスラン、心配してくれてたのか？」

「相手の拳をな」

眉ひとつ動かさず、さも本心であるかのように嘘をつく。それでもウラジーミルは、ニシシツと嬉しそうに笑った。

教室を出て彼らが向かったのは学校裏の雑木林だ。ルスランは、アナトリーという人物が律儀に一方的な約束に従うとも思えなかったが、あえて何も言わずについて行くことにした。またそれを、ウラジーミルは止めはしなかった。

「『学校の悪魔』って初めて聞いたけど、五年前ってことは、ボクが越して来る前の話か？」

「そっぴゃ、ルスランは三才ごろにこっち来たんだっけな」

親の身勝手な都合によって、良くも悪くも影響を受けるのは子どもだ。力の無い存在は簡単に丸め込まれ、やがて疑問を持つことなく成長し、同じ人生観を固定化する。そうした悪循環が社会全体を劣化させ、正邪を混濁してゆく。ついには反転してしまうこともあるだろう。おそらく、それから逃れるには思慮分別を伴った受容と

否定が必要である。

引越す前にどこに住んでいたか、ルスランは記憶していない。ただ、そこがどんなに美しい楽園であるか耳打ちされても、今いるこの土地に来て良かったと、そう思えるほどに心は依存していた。

背丈のまちまちな木が、日の光を遮る。ザリエーシェ公園とは違い、人の手が加わらず伸び放題になった植物たちは、生き生きしているように見える。

湿気を帯びた空気に混ざる土と草花の匂いを吸い込む。すると、それが精気なのだと、誰かが冗談を告げた気がした。

「やめてください！」

約束の場所の近辺で、少女の悲鳴が響き渡った。二人の足は考えるよりも先に声の源へ動く。そして垣間見たのは、ナイフを片手に握るアナトリーと、恐怖に怯えるラリツサだった。

息を詰まらせた一瞬の後、体は勝手に救出へ赴いていた。

先日の失敗は頭にないのか、ウラジミルは殴りにかかる。不意を突かれたアナトリーはぎりぎりまで横に飛び退くが、次いで現れたルスランへの対応が遅れてしまい腕を掴まれた。焦った彼は力任せに振り解こうとする。そのとき、ナイフの切っ先がルスランの手首を裂き、血を滴らせた。

「……ちっ、邪魔すんな！」

「人に刃むけてるヤツを見過ごせるかよ！」

「それに、ラリッサはボクたちの級友だ」

名指しされた当の本人は「あ、あの、違うの」と、おろおろしながら二人を諫めようとする。

「このナイフはあいつらから取り上げたもんだ。俺んじゃねえ」

彼の視線が示す所に、三人の同級生が意気消沈した状態で正座していた。そのうち一人は女の子だ。

「ダチだってんなら、いじめられてることくらい気づけっつーの」

呆れた顔でルスランたちを睨むアナトリーは、その表情のまま、薄っすら涙を浮かべる別の男子二人と目を合わせる。ひい、とおののく彼らに、しわの影を濃くした。

「もう一度言っとく。――男が女に暴力ふるってんな！」

申し訳ありませんでしたあ！ 深々と頭を下げ、三人揃って足早に林を出て行く姿を、ルスランは情けなく思ったが、励ましの言葉は何一つ思い浮かばなかった。

「人は見かけによらないな、ヴォーヴァ」

「それはだれのこと言っただよ」

遠くを見つめ、しばし思考を止めた。

だが、水平線に落ちてゆく太陽を背に、段々と影を大きくする物

体が気になった。

「あれ、もしかして……」

ヴァレンクだった。

黒い髪に黒い瞳を持ち、さらに服装は黒っぽいものばかり好んで着る、「喪服野郎！」である。夜に活動していても見咎められることはないだろう。

「お久しぶりです、ルスラン様」

「何でお前がここにいるんだ！」

「おケガを手当しに」

言うが早いかヴァレンクは小箱を取り出し、てきぱきと治療を施してゆく。ルスランがケガのことを何で知ったのか問うと、「……血のにおいが」としか答えなかった。それとは別に救急箱について尋ねると、誕生日の贈り物として祖父からもらったのだと知った。その際、常日ごろから持ち歩けと言われたという。

手首を完璧かつ迅速に手当した後、今度はアナトリーに「ご無沙汰しておりました、お元気でなりよりです」と評判通りの丁寧さを発揮する。

「死ぬまで無沙汰してりゃ良かったのによ」

喪服野郎の陰気さが移るとばかりに、アナトリーは顔を反らした。

「知り合いなのか？」

やりとりを不思議そうに見ていたルスランが口を挟んだ。

「はい。こちらの方は、お父様とお爺様が勤める病院の、院長の息子さんです」

短気でけち臭く、嫌われる傾向の強い院長の息子。それだけで煙たがられそうな肩書きである。ふん、とまたアナトリーは機嫌を悪くした。

「初めまして。ルスラン様のご友人ですね」

黙りこくった彼に構うことなく、ヴァレンクはウラジミールとラリッサに挨拶をする。通う学校は同じであっても、他学年との交流は少ないため彼らは初対面だった。

じつと、ヴァレンクがウラジミールを凝視し、眠たそうな目は瞬きもしない。

「なぜ、温湿布を貼っているのですか？」

打撲による腫れの対処として最初は患部を冷やし、数日後、血行が悪くなってきたら温める方が良いという。それを告げると彼は、げつと嫌な汗をかいた。昨日、帰宅してから薬箱を漁り、唯一あったのが温湿布だった。彼は湿布が二種類あることすら知らず、湿布であれば何でも良いとそれを使ったのだ。

顔を見ただけで間違いを見抜き、正しい処置を提示したこと、手首のケガを無駄無く手当てしたこと。ヴァレンクと己との差を再確

認させられ、ルスランは密かに齒ぎしりをした。

そしてもう一人、突き刺すような瞳でヴァレンクを睨みつける者がいる。

初等学校は四年制で、六歳から十歳までの児童が通い、それ以降の進路は自分で決めなければならない。ほとんどの子どもは中等の普通科に進むが、特殊な職種を希望する者は専門の学校へと行くことになる。

院長の息子であるアナトリーは、やはり医者になるよう言われていた。見本となるべき父親が尊敬できる存在から限りなく遠くても、反発すれば、代わりはいくらでも作れるんだと脅される。都合の悪いものは、捨てられるだけだ。

彼は今、十歳を迎え人生の岐路に立っている。医者への道を否定すれば捨てられ、父親の言いなりになれば自分というものを捨てることになってしまう。極度に追い詰められた心が最後にした悪あがきこそ、今回の騒動だったのかもしれない。

しかしヴァレンクの手際良さを見せつけられて、闘争心は燃え出していた。それは単に、昨日、「冷やしておけよ」という言葉がウラジミルに伝わっていなかったからではない。

——どうせ捨てるのならば、余計な感情を捨ててしまえ。

純粹に、対抗意識を持てる相手がいるのなら。

二人の幼き好敵手は目標を見据えた。

03 「うしなう」に「わ」はつよくなる

早朝の肌寒さに身と心を冷やされながら、エリヴィラは同僚であった先輩の前に立つ。白む東の空から放たれる光は、闇を影に変え、色彩をもたらす。しかし彼女の周辺は植物の陰となり暗いままだ。

「私、今の自分には仕事を続ける資格がないと思うんです」

受け答えなど期待できないと分かりつつ、ただ、抱えている思いだけを告げる。

「人様のお子さんをお世話していながら、自分の子どもを避けるなんて……」

母親として失格だ。

そして、「シロツメの郷」^{さと}の職員としても失格に違いない。

乳児から五歳までの幼児を預かり擁護する保育所、シロツメの郷エリヴィラは学生のころに見習いを始め、専門学校を卒業してから正式に雇われて働いた。小さな赤子を腕に抱いてミルクを飲ませたり、子守唄を歌って寝かしつけたり、一緒に遊んであげたりする。それが、たまらなく幸福感を満たしてくれるのだった。

ところがこの数年、施設の子どもたちに愛情を注ぐほど心苦しさが増してゆく。お腹を痛めて産んだ我が子、ヴァレンクに、まともな接し方をしたことがないからである。抱き締めてやることもせず、学校にも行かせていない。育児は夫のイリヤに丸投げしている状態だ。

「あの人、何も責めないんです。私のことを。それどころか、普通なら到底無理に思える望みを、微笑んで聞き入れてくれました」

彼の優しさに甘えて、ここまで来てしまった。

外見が他の子とは違うヴァレンクの替え玉として、メシーという女の子をイリヤが連れて来た。彼の親戚の子で親がいないのだと言われたが、当時はともかく、今はその説明に納得しきれていない。だが、真実を問う勇氣も無かった。

立志の時期——九歳の誕生日を間近にし、父親のボリスは直接会って祝いたいと言い出した。頑固親父と称されるほど頭が固いわけではないが、自分の信じる志や意思を貫き通す強さを持っている。申し出を断つても、きちんとした理由が無ければ引き下がらないのだ。

彼を交えるということは、身代わりであるメシーがその日の主役となって、祝福を受けることになる。よって急ぎよ、家族内だけで祝う時間を前日に設けた。ヴァレンクのためだけに。

向かい合った席に座るエリヴィラは、少しだけヴァレンクを見やる。

いつからか、笑うことも怒ることもなくなった。喜怒哀楽の表現は乏しく、日に当たらない肌は白い。まるで人形のようにであった。

何を考えているのか分からない。

都合の悪いことでも承諾する、無表情の能面が怖かった。温厚そ

うな性格の裏に潜む人間らしい心の変動が、密やかに激しく行われているのではないかと、エリヴィラの弱虫をさらに助長させる。イリヤのように、堂々と「おめでとう」を言ったことは一度もなかった。

あのような体に生んだ自分を、さぞ恨んでいることだろう。あのとき、中絶を選んでいれば、辛い思いをさせずに済んだのかもしれない。

食した物に味を感じることもないまま、退室した。

「……最低ですね」

お墓に眠る先輩をしばし見つめ、彼女が生きていたら何と叱責するだろうかと想像し、過去を振り返る。同時に、他人の顔色ばかり気にする自分を自覚した。

+ + ○ + 8 + ∞ + 8 + ○ + +

新人採用が行われるのと時期を同じくして、新生児の九割以上が一斉にシロツメの郷へ預けられる。しかも完全委託制だ。

デミウルゴス協会で子作りを申し込む親は、申請時、希望の性別や名前、任意で身体的・性格的特徴の要望を明記した上で、出生後に引き取るかどうかを選択する。時に要望欄には「オッドアイ」や「超天才」などという、如何にもアレな書き込みがあるのだが、あ

くまで傾向を書くためのスペースだ。すべて反映されるわけではない。

「引き取らない」を選択された子どもは人工の母胎から出された後、家族との面会を経て自動的に施設への入所が決まる。素人が手をかけるより、育児のプロとも言える集団に任せた方が安心だと思っっている人が多く、またそれが習慣化していた。

「ねえ聞いた？ 今度、神の御業以外で生まれた子が入って来るらしいわよ」

どこから情報が漏れたかは知る由もないが、職員の間では最近、この話題で持ち切りだった。成人になったばかりのエリヴィラも、無関心を装うものの、他の人たちの会話には聞き耳を立てていた。一般の人間が生命を作り出したとは、信じられないことだった。

シロツメの郷は最も大きい保育施設で、全体では三百人強を預かっている。その中で、新たに運び込まれた新生児の眠る携帯型の保育器の数は、約五十。それぞれにネームプレートが取り付けられており、そこには渦中の、イワン・バラノフの名前もあった。

職員はそれなりに多いはずなのだが、気味悪がって世話を申し出る者はいなかった。ただ一人の女性を除いて。

「先輩、あの、本当に……？」

「あら、だって可愛いじゃない！ 末の弟より可愛いかも」

名乗りを上げたのは二十歳のオルガだ。五人兄弟の長女で飾り気が無く、エリヴィラとは学生時代からの顔見知りである。末弟は生

意気な四歳なので、どうしても無垢な赤ん坊の方が可愛く思えてしまふのだらう。それでも彼女は、年下と見ると見境なしに世話を焼きたくなるのだった。

普通の子と何も変わりはない。

施設内に安心感は広がる。しかし先入観はそう簡単に拭われるものではない。自分たちの属する大多数派が当たり前であって、出生が異なるだけで少数派は注目され、揚げ足を取られる。その差異が悪いイメージを持つ場合、尚更、色眼鏡は外れにくく、対象を忌避しがちになる。そして彼らはこう思うのだ――あれは自分たちとは違う、いつ何をしでかしても可笑しくはない、と。

実際のところ、エリヴィラも似たような思いを抱いていた。先輩のオルガは学生のところからの憧れであり、周りに左右されない芯の強さを羨みもしているが、彼女のように、すんなりと異質を受け入れられるかは話が別だ。二歳しか変わらないのに、と卑屈になっても憧れは遠いまま変わることはなかった。

寝食を施設で過ごす幼児同士、互いに成長を高め合い、適切な育児法で育て上げられてゆく。彼らの日常の大部分は職員と共におり、生みの親と言うべきか、本来の親は定期的に我が子のもとへ訪れる。顔を覚えさせ、誰が真の親なのか認識させなければならぬからだ。だが、毎日スキンシップを欠かさない者もいれば、週一、月一、ごく稀に半年に一回しか対面しない者もいる。結果、子どもたちに「先生」と呼ばせ距離を隔てても、育ての親の方に親和感情を強く持つ、というケースが少なからずあった。

家庭での信頼関係を危惧してなのか、満三歳を迎えると、「完全委託」から「一時委託」への切り替えが急激に増加し、四歳以降は

割合がそれまでと逆転する。

変更の理由を他に考えるならば、乳幼児期、特に三歳までに脳の七〇八割ほどが出来上がるらしく、ある程度の発達を良い環境で終えたところを引き取る、ということだろうか。いや、一般人がそんな知識を頭に入れているはずはなく、やはり先人に倣っただけなのだろう。

何も知らなかった子どもたちは、大きくなるにつれて様々な環境に揉まれ、各々が自覚を芽生えさせる。大人を観察し、真似をし、見解を深めて、徐々に染まってきた循環の一部が彼らを支配するのだ。つまりは、人から生まれたイワンと仲良し小好しになろうという、奇特な人間が育つ可能性はゼロに等しいのである。

——あの子には関わらない方がいい。

毒が静かに染み込むように、その既存の価値観は無意識に作用を及ぼす。そうしてイワンは、人との接点を極力減らされて歳を重ねていった。

「他人^{ひと}の物を盗るのは駄目って、何度も言ってるでしょっイワン！」

「……うっせえババア」

「なっ……、ま、まだ三十にもなってないのに『ババア』とは何よ、『ババア』とは！」

本当は、貸してほしいと再三言っても返事すらしてくれなかったから、向きになって盗ってしまったのだと説明したかった。しかし何と言って良いか分からず、つい憎まれ口をたたいたのだった。

「その上は『シワクソババア』なんだから、まだマシなんだぜ『オルガババア』は」

「……イーワーン？」

引きつる笑顔に血管を浮かべ、今にも八つ裂きにしてやるぞと威圧する、殺気のようなものをオルガから感じる。暴君イワンも黙る、鬼ば……もとい、般若であった。

血の気が失せて顔の青いイワンは、たじたじとなり大人しくなっていた。

「あの子ら、アタシをおちよくってんのかねえ」

「さ、さあ……」

傍らで見守っていた、三十路をとくに過ぎた女性職員の言葉に、エリヴィラは苦笑するしか対処の仕様が無かった。

乳児期と比べると一緒にいられる時間は減少したが、こぞって相手にしてくれない環境下にいるイワンにとって、オルガは唯一、気を許せる居場所的な存在だった。両親は共働きで、尚かつ周りの目を気にしている。彼らは彼らなりに会う努力をし、足しげく施設へやっては来るが、会話が続かない。温和な母親が質問をしてイワンが一言二言それに答えるだけ。屈強そうな父親はその二人を見つめるだけだった。

年長のイワンは、もうすぐ「両親」と一つ屋根の下で暮らすことを理解していた。それ故に雰囲気が悪くなってはいけないと、彼ら

の前では暴言も吐かず素直になるのが最近の常なのだ。

その反動によって、オルガに対しては反抗的で暴力的な面を見せた。しかしながら彼女はイワンの心情を読み、甘んじて受け入れる。もちろん悪い行いは叱るが。

幼いころ聞き分けの悪い子の方がはつきりと自己主張をし、自我・自律心が作られるという。

今は感情を表に出して遠慮なく歯向かうイワンが、本当の家族と生活を始めたら——そう思う度、失礼だろうがオルガは心配を募らせた。

卒業式を数時間後に控えた朝、彼女はイワンを外に連れ出した。二人つきりになれる時間は、事実上、これが最後だったからだ。そのために仕事の一部を放って来たが、上司は素知らぬ態度で味方してくれていた。

「今日でお別れねえ、イワン」

新鮮な空気。穏やかな風。無言の男児。

いつまでも優しい時の流れの中にいたいと思った。

「お父さんとお母さんの言うことはちゃんとして聞いて、隙あらば甘えるのよ」

下を向いて、無言。

「ほんつとにもー。何かしゃべってよね」

頭上めがけて昇りゆく太陽の暖かさ。

氷が溶け出すように、心も解凍されるようだった。

「……おれがわがまま言ったら捨てられる」

初めて耳にする、イワンの弱音。

嬉しいような悲しさがオルガを襲う。

「そんなことない。あのね、イワン。誰かに自分を好きになってほしいなら、まず自分を好きになるの。それから、相手がどんなことを考えてるのか想像して、尽くしてあげる。イワンなら、それくらい出来るわよ」

——自分に自信を持って、気を利かせる。

「どういう意味？」

「もー……そのうち分かるようになるのっ」

「わかるようになったらたぶん、その言葉は覚えてない」

「覚えておきなさい！」

悪役の捨て台詞を恥ずかしげもなく言ってしまうオルガ。

咄嗟に何を口走ったのか、気づいていないのだろう。

「じゃーおれがデカくなつたとき覚えてなかったら、もっかい言うてよ」

「……ふふ、そうね。そうするわ」

足下の花は笑い、美しい。

それは僅かな間だけなのだろうけど。

「あ、でもそのときって『シワクソババア』になつてるのか」

「イワン？ それって誰のことかなあ？」

ぴくぴくと顔の筋肉を動かす般若が再来した。

鉄拳をくらわせようと、彼女の腕が振り上がり、思わずイワンは目を閉じる。

痛覚は反応しない。代わりに、全身が圧迫感に包まれた。

恐る恐る目蓋を開けると、しゃがんだ彼女に抱き締められているのだと悟った。

「イワン……卒業、おめでとう」

柔らかな感情をぶつけられ、体が、震えた。我慢して我慢して、耐えきれず涙が零れた。

見なくても手に取るようにイワンの動作が分かるオルガは、くすくすと体を揺らす。

「わ、笑うなよ！」

彼女の言動が癪に障ったらしく、力を目一杯込めて押し退けた。

バランスは簡単に崩れ、短い悲鳴を発しながら尻餅をつき、転がった。

「あっ……」

意図しない結果にイワンは焦る。

ただ、気恥ずかしさを払いたかっただけなのに。

転ばせる気は無かったのに。

「あはははっ！ なーんて顔してんのよ、情けない」

眉を八の字にした泣き顔。しっかりと罪悪感を持っているのだ。

「……大丈夫よ、イワンなら」

シロツメの郷を、自分を、卒業できるよ。

むすっとしたイワンだったが、何も言わずオルガの横に寝そべって、しばらく空を見上げた。地面に広がる白詰草は、そっと、二人分の重みを受け止めている。

知っているつもりでも、ただ他人事のように捉えていただけだった、というのは情報が溢れる社会ではよくあることかもしれない。実際に体験し当事者になってみれば、如何に浅い知識であったか思い知らされる。むしろ自分の方がより一層、過酷な状況下に置かれたのだと決め込む者もいるだろう。

「まだ顔色が悪いわね。出産って、そんなに大変だったの？」

「……ええ」

卒業式から約二ヶ月、妊娠していることが分かったエリヴィラは、シロツメの郷を退職した。大きくなってゆくお腹を抱えながらでは仕事が出来ないからだ。収入と生き甲斐を手放すことは苦渋の決断であったが、五年間もイワンとオルガを見て来たのだ、覚悟するまでの時間はそう長くはからなかった。

辞めた後も、オルガは時々こうして会いにやって来る。妊娠中は父、ボリスの家に戻っていたが何もすることがなく、彼女が話し相手になってくれたことは幸いであった。

お腹が目立たない大きさだったとき、オルガは「これから寂しくなるわ」と先行きを憂えた。イワンは卒業、エリヴィラは離職。可愛がっていた子や後輩が続けざまに自分のもとを離れ、遣る瀬無さに気が沈んでいたのだ。そんな彼女を前にして、まだ余裕のあったエリヴィラは努めて明るく振る舞った。それが今は逆転している。

現実を目の当たりにし、笑う元気もない。

「生まれた子はもう施設に預けたの？」

「病院にいます。……治療が必要らしくて」

「そう……」

退院したとしても、誰かに託すようなことはしないだろう。

不安そうな表情は重苦しい気配を含み、実の詰まった稲穂が頭を垂れるようにエリヴィラは俯いた。現状における『実』とは負の感情ではあるが。

見兼ねたオルガは威勢良く立ち上がり、一口も飲まれていない冷めた紅茶に波を起こした。

「まったくもーっ。こんな美人を困らせるなんて最っ低な男ね！
どんな奇術師か知らないけど、見つかったら拳骨をかませてやるわ
！」

わなわなと怒りに全身を震わせ、ふんつと鼻息を鳴らす。拳骨というものは、おそらく子どもを叱るときに振るうのであって、良い歳をした大人が頭部の上から殴られる画など想像し難い。だが、そんなイメージを思い浮かべてしまったエリヴィラは、ぷつと小さく息を吹き出した。

ようやく笑った、そう言ってオルガも笑みを返した。

奇術師と言ったのは、医療器具も使わずに子を宿らせたからだ。その男とエリヴィラは出会って間もなく親しい友人となった。そし

て奇妙にも互いに名乗らぬまま別れが訪れた。男が突然、行方をくらませたのだ。いなくなってもう一年になるが連絡はまったくない。

「元気出して！ 今は忙しくない時期だから良いけど、そのうち、そう頻繁には会いに来られなくなるだろうし」

入所の際には卒業時のような式は行われない。手続きが済み次第、順次シロツメの郷へ送られる。一律に迎え入れるシステムでは、手続き終了後から式までの合間、子どもを管理してくれる場所がないためにデミウルゴス協会の負担となってしまうからだ。加えて、すべて他人に任せきりな人々にとって「始まり」などウドの大木と同等に無価値であり関心を持たないのである。

年長者が卒業する年度末は全体数が最も少なくなり、職員が一旦、肩の荷を下ろす区切りの時期でもある。とはいえ入所者は時を選ばずに流れて来るが、年度始めよりは比較的に暇を取り易い。しかし、休暇届を出したオルガがエリヴィラの家に来たのは、彼女に男つけが皆無だからという理由では決してない。

「そんな暗い顔してたら、好きな男だって逃げるわよ？」

「冗談めいた言い方をしているものの、見透かしたような目を光らせている。」

「わっ私、先生のことなんて別に……」

「やっぱり気になる人がいるのね。誤魔化したって無駄よ？ その赤い顔が何よりの証拠！」

言及すれば慌てた反応をするだろうと予測していたオルガは、犯

人を確定し追い詰めた探偵のごとく自信満々で、至って涼しげな態度だ。さあ早く、すべてを話してご覧なさい、とでも言いたそうな関心の眼差しをする彼女に勝てるはずもなく、未だ頬の赤みが引かないエリヴィラは小さく息を漏らした。

成人する何年も前に他界した母親は、この時代でも珍しい病気を患っていた。あまり研究もされておらず治療法はない。ただ衰弱死を待つしかなかった。当時すでに医者として働いていた父親は、彼女を救いたい一心で究明に勤^{いそ}しんだのだが、その努力は空しくも報われることなく気概だけが空回りしていた。

亡くなった後はザリエーシェ公園の片隅にある墓に名が刻まれ、エリヴィラは悩み事があるとそこを訪れて気休めを欲した。人が滅多に来ないであろう早朝を選んで。そして同じように朝早く公園に出向き、夢い幻のような佇まいを高台から窺い見ていた男がいた。それがイリヤだった。

博学で機知に富み、掴みどころのない性格は相手の調子を狂わせ、自分のペースに引き込む。細い体つきからは微塵も感じない頼もしさ、エリヴィラの心に光を灯し生を支えた。

今までは「恋」という感情には鈍く、それ故に異性との恋愛交際は断^{こと}つてきていた。が、そんな人物像を易々と打ち砕いた人間がいることに、学生時代を知るオルガは驚異と歓喜を胸に膨らませ、照れた様子の後輩を微笑ましく眺めながら話に耳を傾けた。もちろん、己の男運の無さを悲観する気持ちは遥か彼方へ投げ捨てて。

職場を去った理由を聞き出したとき、本当は反対の立場だった。子どもの命惜しさに出産したところで、周囲を気にして肩身の狭い思いをし、バラノフ家と同じ道を辿るのではないかと危ぶんだか

らである。

産婦人科での累計出生数が着実に伸びてくると、出産過程を目や耳にする人々も増え、結果、虚実の織り混ざった噂が凡常に色濃く影を落とした。そして『ハラモゲ』という差別語まで造られ、口ずさまれている。

近年デミウルゴス協会は、世間に出回る情報を管理・抑制し始め、産科の存在が広がり過ぎないように関係者に指示を出した。病院側も、利用者に正面ではなく裏口から入ることを呼びかけた。それによって事態は悪化せずに済んだのだが、如何せん人づてに浸透する噂は根絶が難しい。まるで、劣化分裂を繰り返しながらくねり進むヘビが、人間に寄生してゆくような悪夢だ。

いくら配慮があろうとも、無理をして産む必要はないとオルガは思った。しかし、シロツメの郷でともに仕事をしてきた同僚の面影はなく、そこには「本当の母親」となったエリヴィラが対座していた。なぜかそのとき、これまで普通だった距離が大きく離れている気がした。

励まして男の話を聞いている今現在も、変わらぬ感覚が居心地を悪くしていた。

+ + ○ + 8 + ∞ + 8 + ○ + +

乳幼児に囲まれた生活を再び送る。イワンが卒業してから三回ほ

ど年度が変わったところ、エリヴィラはシロツメの郷とは別の地区で働き出した。復職したくても、元の職場に戻るのは気まづかったのだろう。その保育所は中規模で、それなりに忙しく、それなりにゆとりがあった。

「ここにいる子は、普通、なのよね……」

すやすやと気持ち良さそうに眠る子どもたちを見回し、感慨に浸る。

寝相の悪い子が布団を蹴飛ばした。はみ出た小さな足を見て、切なさが込み上げてくる。しかし頭を軽く振り、すぐに払拭すると乱れた寝具を整え、側を離れた。

無邪気でまだ何も知らない幼い未来の担い手たちは、今日も夢境を彷徨っているのだろうか。彼らは昔人たちが塗り固めてきた道を歩み、大人になって世界の腐敗を手助けしてゆく。一步逸れた先に並べられた現実には気づかないまま、いつのまにか柵の中のごとく閉じられた空間に押し込められ、無知という自由を歓迎して謳歌するのだ。

幻こそ真であり、己が思想は世の理より正しいもの——そう信じて疑わずに。

もしも、あぶれた者が枠外から顧みたなら、目に映るのは不毛な行いばかりかもしれない。下らない物事を意気揚々と山積みにする様は堪らなく滑稽で、さぞ厭^{いと}わしいことだろう。

あまりにも衝撃が強く目を背けるときもある。まさにエリヴィラが直面している問題だ。

両腕のみでも大抵のことは一人で出来るようにと、甘やかさない方針を聞かされた。だが、言葉通り聞くだけだった。

何かを共有しているという事実は一体感を生む。面識のない誰かの行為でも、その輪の代表と捉え、あたかも自分のことのように一喜一憂するのである。やいのやいのと横から口を挟みたがる人もいるが、その大方は自ら関与しているのであって、他者ばかり責めるのは自覚が足りない証拠であろう。ともかく、エリヴィラは医者のことくに己を重ね合わせ、実際には何も行動しなかった。ただの担当医であるはずの赤の他人に甘えて、依存するだけだった。

男はそれを分かっているながら夫婦となることを強く望んだ。「長所も短所も君らしさだよ」と優男全開な熱情を受けてしまえば、彼に好意を抱いていたエリヴィラは拒否など出来ない。むしろ喜んで結婚に応じたということは、それほどまでに自分が見えていないのだと言える。

幸福感とは盲目的な感情か。でなければ暗愚あんぐの極みか。どちらにせよ人の幸せは誰かが「これ」と断言するものではない。彼らはそれぞれに出会いを感謝しているのだから。

もちろん幸の裏には不幸がある。何かにつけ神経質になると、それはもう塗炭の苦しみの始まりである。深く思い悩まぬ人生が楽に感じるのも不思議ではない。

「そろそろ変わり目の季節ねえ」

ちよくちよく彼女がやって来るのは何年経っても変わらないようだ。

「もう三歳になるんだっけ？」

行儀良くソファーに座る子どもに目を向けた。エリヴィラの隣で背筋を伸ばし、大きく丸つとした黒目の上部は目蓋に隠れている。じつとオルガを見つめ、何か物欲しそうだ。

「この子、言語発達が遅れてるみたいで、覚えた言葉もまだ少ないんです。……姿勢だけは立派なんですけど」

礼儀をわきまえて行動する大人びた幼児の姿に、心配は必要だろうと肩をすくめる。

「施設の子たちとはまるで正反対ね。もー一日中振り回されっぱなしなんだから！ 来月で卒業の年長組には『もう年なんだね、先生』なんて言われたわ」

ぶすつとした渋い顔で愚痴を言う様は、実年齢より二、三歳ほど老けて見えたのだが、エリヴィラは黙視することにした。気心の知れた者との間にも礼儀はある。思ったことすべてを言う必要はないのだ。その場を半笑いで済ませると、オルガは「そんなに疲れた顔してるかしら」と納得しない声を上げた。

「先輩も大変なんですネ」

軽い気持ちで返答し受け流すつもりだった。だが冗談半分な空気は薄まり、エリヴィラは戸惑う。そして彼女、オルガの表情は妙に真剣なものに変わっていった。

「ねえ、シロツメの郷に戻って来てくれない？」

突然の誘い。なぜ今更な話を持ち出すのか分からなかった。

「もともと保育士を目指す子ってあまりいないでしょ？ 医療系の仕事みたく対策を練ってくれば良いんだけど、文句言ったら『協会のお膝元のくせに厚かましい』とか切り返してくるからね。ほんっと腹立たしいわ」

いくら道具が進化しようと最終的に人の手は加わる。そのため手術のような高度な作業を機械任せにするとしても、相応の知識と判断力はなくてはならない。スイッチ一つに伏在する多大な責任は、結局のところ人間に返ってくるのだ。

就職のハードルが従来より下がったのは確かである。しかし、報酬も少なに骨身を惜しまず人のために働く、医者のような職業は不人気であった。そこで講じられた措置というのが給与の値上げだ。要望は随分と昔からあり、二十数年前、ようやく実現した。今でこそ金の亡者が集まる職と化したか、それまでは殊勝な心持ちの医者たちが、誇りを持って仕事に徹していた。

「でも保育士の万年多忙は給料が上がっても解消しないと思いますよ」

「そうね。子育てって人によつては医療より厳しい仕事かもしれないわ。お金が欲しいからって子どもの相手をして、上手くいくわけがない。それに、シロツメの施設が出来たのはそういう、小さい子を苦手とする大人が増えたからなのよね」

一緒にいるとイライラする、つい手を上げてしまふ、愛情が持てない。

こうした事例は父や母に限らず、人々は皆一様に自分本位で他を動かそうとし、我を張って傷つけ合っている。人間はいつ、どのように感情を洩らしたのだろうか。

喪失したもののすらく分らないのだとしたら、一体、誰が彼らを救えよう。

「……今年度の、保育専門学校の卒業見込み数、エリヴィラは知ってる？ 例年の半分なんだって。子を預ける人は絶えないのに、受け皿となる人はどんどん減ってく……何でだろ」

ガラス窓から入り込む光は明るい。ただ、オルガの伏し目がちな顔には届いていなかった。彼女の胸の内を形象化するかのように陰影は濃い。

「それで……どうして先輩は私を郷に？ 今の学生に何か問題があるんですか？」

するとオルガは首を横に振り、否定の意を示す。

「経験不足っていうのが問題なのよ」

一拍の間を置き、人手も足りないしね、と続けた。

新人が育つのに時間もかかる。授業内での実習と新人保育士としての実践は異なるのだ。希望する人数が期待できないなら、せめて即戦力となる人材が欲しい、という意見が出るのは致し方ないことだろう。特にシロツメの郷のように大きな施設であれば尚更だ。

「無理を言ってるのは分かってる……けどね」

そこで言葉を一旦区切り、ずいっと身を乗り出した。

「最大の理由は、またエリヴィラと仕事がしたいからよ」

太陽の日が当たる位置に頭が移動し、オルガの横顔は煌々と照らされる。緩やかに弧を描く口元の紅がやけに鮮やかで、女性らしさがあつた。

すーすーと寝息を立てる幼子とは対照的に、エリヴィラの目は見開かれた。

彼女が悲観的な面を見せるのは初めてだ。年下相手に全力で接し、^{はっさつ}澁刺と活動する、頼れる姉御肌というのが学生のころからの変わらなないイメージだった。一度でも話したことのある人ならおそらく、しみりと物思いにふける姿など想像し得ないだろう。何よりも、常に他人を第一に考える彼女が、控えめながらも自身の都合でお願いを口にしたことにエリヴィラは驚いた。

年のせいで気が弱くなったのかしら、と会話の趣旨を脇に置き失礼なことを思うも、やはり声には出さず胸の内にしまった。

「実は、私も同じことを考えてました」

そうやってエリヴィラはにこりと微笑み、オルガに事情を話し始める。

「私に弟がいること、先輩は知ってますよね」

「ええ。確か、あなたと同じ年齢で、成人してから音信不通なのよね」

子どもを作るために協会へ申請する際、「希望の性別」の欄は記入が必須だ。これは、生み分けが技術的にも倫理的にも可能となり、それに伴い仕様が若干変わったことによる。些細で何気ない変化だが、隠れた時代の象徴と言えるかもしれない。

都合に合わせて物をデザインするように、命の形状すらも選り好み出来る。そんな現代の普遍も大昔は激しく非難されていたらしい

が、世代を重ねることに異を唱える者が減り、倫理問題を理由とした反発は古い思想だと切り捨てられてきた。しかし、いざ選択の自由を与えられると、人間は意志の弱い者ほど思考の海に溺れ、妥協を知らない者は対立を悪化させる。――エリヴィラの両親もこの深みに嵌^はまつた口だ。

彼らは当時、男の子と女の子、どちらを第一子にするか意見が分かれていた。優柔不断な性格が原因ではない。むしろ逆で、二人に備わる不屈の頑固さが意見の統一を阻害していたのだった。

冷戦状態に近い夫婦の仲は殺伐とし、公共の場であっても弱まらない異常な気配は人々を遠ざけ、凍りつかせるほどの威力を発揮した。特に父・ボリスに至っては、臆病風に吹かれた上司に代わって伝言を託された勇敢なる若者に、「なるべく患者との接触は避けるように」と言われる始末だ。余談だが、その回りくどい命令は火に油を注ぎ、周囲は大炎上というより極寒の冷氣に包まれたという。

傍迷惑な悶着に終止符を打ったのは母親の方だった。

陰悪ムード真っ只中でありながら「親が貴方に会いたいって」と、彼女は洩るボリスの尻を叩いて連れて行く。家族は無愛想な彼を暖かく迎え入れ、「娘は負けん気がやたら強くてなあ、言葉じゃ誰も敵わん」などと武勇伝のような昔の話を暴露した。とても和やかな束の間の「休戦」である。そして、そこで彼女はこう言った。最初からこれを狙っていたかのように。

「あ、そうそう。初めての子どもは女の子って決めたわ。彼も了承済みよ」

男児を希望していたボリスはかなりの衝撃を受けた。もちろん了

承した覚えがないからだ。しかし、言い訳や否定をすれば信頼性は失われ人格を疑われるだろう。第三者に宣言してしまったものは決意表明であろうと嘘だろうと簡単に無かったことには出来ないのだ。ボリスは胸中で弁明を叫びつつ、「あら、そうなの？」という義母の問いかけには哀れにも頷く他なかった。

こうして彼の口下手を利用した彼女の「言ったもん勝ち作戦」は見事、敵の強固な門を打破することに成功したのであった。

負けた悔しさより己の役立たずな性格を怨み、ボリスは自己嫌悪に陥った。腐れ縁の友人には「情けない」と軽く見下され、実父は「何に対しても折れたことが無いお前も、惚れた女にや弱かったようだなア！」と追い打ちをかける。気分的には落ちていた彼だが、このときばかりは殴りたくなるほど憎く思ったに違いない。

「貴方は寡黙なところが魅力なんだから。今回だって、文句も言わずに合わせてくれて嬉しかったわ」

ありがと！ただ、妻のこの一言を聞いた瞬間、密かに白旗を上げた自分はやはり、彼女の前でだけは脆弱に成り果てるのだと認めた。褒め称え感謝する——それが計算だったのかは神にでも尋ねるでしょう。

短期間の内に、溜まった疲れがどっと押し寄せた顔は老けに老け、渋さや威圧感がグレードアップしたようだ。すれ違う人々は皆、安心感と緊張感で静かになってゆく。平和な生活を取り戻した顔見知りの者たちも、彼の変わりようについて口々に噂をした。まったく以て、話題に事欠かない男である。

後日、デミウルゴス協会に二人で赴き手続きを行った。ところが、

妻が申し込んだのは二人分。女の子と男の子であった。どういうことかボリスが問うと、彼女は「賑やかになりそうでいいじゃない」と、白い歯を見せて笑い何とも楽しげに答える。啞然とする彼は、父親の情報を書く欄に記入を求められ、複雑な心境で促されるまま空白に字を綴った。後に相談に乗った友人曰く、「勝者の情け」なのだそうだ。とは言っても、利便性の関係で兄・弟、姉・妹の区別はつけなくてはならない。実際には申請が受理された時点で誕生日は決まるのだが、一度に数人分の届け出があった場合、提出された順番が物を言う。

「勿論、女の子の方が先になるように出させてもらうわよ？」

あの壮絶な争いは結局、姉弟にするか兄妹にするかをかけていただけ、という事実が作られた。最早、彼女に調子を狂わされるのは日常茶飯事として、今後は家族を養うためのお金を自分が稼げるのか、ボリスは真剣に思案するのだった。

娘たちが志を立てる年まで成長し、幸せが続くと思われたその折、彼らの絆を揺るがす不測の事態が起こる。

「原因不明……？」

妻が病に倒れた。突然。前触れもなく。

それは現代の医療でも治せない難病だった。

入院から半年が経つと今度は高熱に苦しんだ。他の病気が併発したのかもしれない。ボリスは仕事の暇を盗み、悲痛な表情で汗みずくになる彼女の側に寄り添った。誰かが声をかけるまで、石像のようにな動かなかったという。

数週間が経ってようやく容態が落ち着いたのだが、ほどなく視力の低下が判明した。そして、やがて混乱を深めたのは精神の崩壊である。

物がぼやけて見えることに不安を感じたのか、彼女は一晚中、金切り声で泣き叫んだ。医師たちは一時的なものだろうと考え、宥め役を夫に任せて出て行ってしまった。しかし翌日、お昼前に目を覚ましたその患者は異様なほどにこにこ笑っており、昨夜の光景を目撃していた全員が戸惑いを隠せなかった。日を追うごとに症状は悪くなる。過敏に怖がり、驚き、怒り、悲しみ、喜ぶ。ころころと脈絡もなく感情が変わるのだ。

病人の母を中心とした生活は二、三年続き、娘と息子の様子も次第に良くない方向へ向かった。親がほとんど帰らない家に二人きり。子どもしかいない空間は広く、押し退けられない重圧が会話をも奪う。一人ではないはずなのに、彼らは孤独に嘔さいなまれた。

衰弱が進み死を迎えると、弟は徐々に反抗心を強めエリヴィラに敵対したり、父の逆鱗に触れることもあった。成人すると同時に家を飛び出した彼はそれきり、行方が分からなくなっていた。

「私が働いてる施設に、彼の子どもが預けられているんです」

再就職した場所で馴染みのあるファミリーネームと遭遇し、まさかと思い調べてみると、父親の欄にはエリヴィラの弟・パーヴェルの名が記されていた。

顔を会わせれば諍いが生まれる。そう感じて慎重に過ごしてきたものの、満二歳となった息子のルスランに彼が面会に訪れたことは、

今現在まで一度もなかった。とはいえ来年度には三歳になる。一時委託へ切り替える可能性も始め、いきなり鉢合わせする確率も高まるのだ。

「家族間の問題で周りに迷惑をかけるわけにもいきませんし、私の方から身を引いた方が波風は立ちにくかったんですよ、昔から」

だから辞める気ではいたんです、とエリヴィラは続ける。

「それに、手際がいいと上司に褒められたんですが、それで向こうの先輩方の気分を害してしまったようで……少し寂しくもあったんです」

ただ、シロツメの郷を退職して今の勤め先に来たという過去があるため、早々に辞表を出すことは憚^{はば}られた。そして、そうこうしているうちに約二年ほどジレンマを抱えたまま過ごしていたのである。

「でもオルガ先輩に『また一緒に仕事をしたい』と言ってもらえて、すごく気持ちが楽になった気がします」

あっちへこっちへふらふらと、こんな不安定な自分を再び受け入れてくれるのだろうか。だが憂慮して踏みとどまっても状況は変わらないどころか大抵の場合は悪くなるものだ。しかもそれは救いの手が差し伸べられるまで続くのだらう、きっと。

「じゃあ郷の方には話を通しておくわね？ もーバリバリ働いてもらうんだから！」

「お手柔らかにお願いします、先輩」

久しぶりの喜びを精一杯、体で感じる。エリヴィラは忘れていた
高揚感に胸を躍おどらせつつ、そつと窓外の明るみに目を向け微笑んだ。
——もうすぐ惨事が起こるなど露ほども知らずに。

「おれが好きなのはオルガだけだ！」

「はいはい。ありがとう、アナトリー」

朝から元気に告白してきた男の子の頭をぼんぼんと手で叩き、「嬉しいけど、ちゃんと『先生』をつけなさい」とオルガは^{たしな}める。朝ご飯を食べたばかりで早々に疲労を溜めたくはない。にもかかわらず、起床から幾許も経っていないために寝起きと同等の思考回路は面倒事がお好みらしく、彼女の言動はぞんざいであった。

「ちっせーからってバカにすんなっつーの！　すぐにオルガよりでかくなって、オレが頭ぼんぼんしてやんだからな！」

一人の男として真剣な想いを告げているのに相手は受け流す。悔しさに地団駄を踏んだ。

彼らがいる廊下は、一般の大人が横に五人並んでも幅に余裕がある。窓も、鳩尾くらいの高さから天井にかけてアーチ状の造りになっており、日の光と開放感が満ちるここは子どもたちの明るさを育てる助けとなっていた。

「あたしはアナトリーが一番すきー！」

隣にいた女の子に抱きつかれて男の子はよろめいた。ぎゅうぎゅうと加減のない抱擁により腕は体に減り込んでいる。

「ぐおっ……は、はなせ虫頭！」

「やだー！」

ひょんひょんと猛攻を振るう二束の髪の毛の動きは断固拒否という意思表示らしい。通常のツインテールよりも前頭部寄りに結われたそれは虫の触覚にも見え、彼女が好意を向ける対象は「虫頭」と呼ぶ。

「ほ、ほらいライダちゃん、そんなことしないで僕と遊ぼう？」

子どもたちの後ろにいた青年は幼女を誘拐しそうな怪しい言葉をかける。ここが保育所で彼が保育士でなかったら、近くにいた大人は全力で飛び蹴りを繰り出すことだろう。

「おやつも後であげるから」

引けた腰に気弱な顔、ぎこちない微笑み。甘い誘惑。まさに周囲を警戒して焦る挙動不審な人攫いがここにいた。

「ぜつたい、いやあー！」

大口を開けての拒絶反応は男に多大なる精神的ダメージを与え、節足動物を彷彿とさせる小柄な生き物の優勢は誰の目にも明らかとなった。彼らの間では、虫を嫌う人という構図のベクトルが真逆らしい。ちなみに、しがみつかれたままにいる幼児は肉体的ダメージを耳に受けたようだった。

「きらいきらい！ こないでー！」

「イライダうるさいっ声でけえ！」

きゃーきゃーと騒がしい朝は珍しくない。夜に爆睡してもらった
めにも、子どもたちの有り余る元気は発散させる必要がある。寝る
子は良く育つ。疲れるまで遊ばせるのだ。

「……我が豪放たるお母様、僕にこの仕事は向いていないようです」

「明後日の方向に母さんはいないでしょ。一々しよげるのは煩わし
いから早く立ち直りなさい」

騒音を背に男がぶつぶつ呟くと、オルガは冷めた目と言葉で彼の
ガラスの心臓を貫いた。

「いや、立つよりも僕は始めからやり直すことにする」

「あーもー！　しゃがむなイジジするな子どもに戻るな！　とっ
くに成人したでしょう！　人生のスタートラインまで逆走しなくて
いいのっ」

叱れば縮み、褒めても縮むのがこの男の特徴だ。具象化したマイ
ナス思考とでも言おうか。ことあるごとに落ち込んで陰鬱さを撒
き散らしている。彼は一種の生物兵器としては完璧かもしれない。
だが弱点は存在する。毒気を消す唯一の薬、それは「純粋な子ども
の好意」だ。希望を持つて保父の職に就いた割には誰にも好かれず、
果敢に出撃を試みても撃沈されるのが常ではあるが、稀に幸運の女
神が微笑んだときの人格が崩れた様は「浄化」と呼べるだろう。

「アナトリーが僕の分まで愛されるなら、もう悔いはない」

「それって遺言？」

「生きる決意」

他に嫌われ自ら引いての退行人生を表明した男の目は、死んだ魚の目と同じであった。

「もうおれ目細きらいだ！ 虫頭はもつときらいだあ！」

振り解くことに体力を消耗したアナトリーは半泣きで叫んだ。ぜえはあと息切れしながら、イライダというアクセサリーを身につけている。

「『メボソ』なんて呼んじゃ駄目って言うてるでしょう？ 『ムシアタマ』もやめなさい」

「だって目え細いだろ。イライダだって頭が虫じゃん」

「そういう問題じゃないの。とにかくやめなさい。それにね、イライダも女の子なのよ？ 普通は虫なんて呼ばれたら嫌な気持ちになるの」

「……オルガも？」

「ええ。もしかしたら、アナトリーのこと嫌いになっちゃうかもね」

そんなの嫌だ！ と強く思う。そして熱い心でオルガを見つめる。見つめるだけで、何故か口には出せなかったが。

しばらくして彼は唇をへの字にしつつも彼女の主張を飲み込み、納得しようとした？？そのとき。

横槍が飛んで来た。

「あたし虫きらいじゃないよ？　せんせー変わってるう」

固まりかけた何かがアナトリーの中で木っ端微塵に砕けた。彼の真横では「イナゴもオケラもお友だちー！　銭取り銭取り天の敵！」とイライダが軽快なリズムで歌っている。

「僕は教えてないよっ、こんな歌！」

間も空けずおろおろ声を上げたのは細い目の男である。キツと睨んでくる般若に自身の無実を訴えているのだ。

彼女、オルガの顔面に刻まれたしわは数年前より深くなっており、その刺すような視線を向けられると年下ならば大人でも怯んでしまう。本人がいる場で言及する猛者はいないものの、着実に「鬼婆」という分類へ片足を沈めていることは否めない。

何故よくも分からない歌如きに怒りを覚えるのか、男には皆目見当がつかなかったようだが、オルガの顔が普段の様相に戻りひとまず胸を撫で下ろす。一拍を置いて、さきほど流れた数滴の冷や汗が悪寒として尾を引き、ぶるっと身震いした。

「あ、おはようございます。オルガ先輩」

通路の曲がり角から現れたのはエリヴィラだった。いつも薄化粧で済ましている彼女も、最近は多忙で目の下にクマが出来たため、そこだけは隠すように少し濃い。

オルガが「おはよう」と言うと、次いで二人の子どもが挨拶をし、

やや遅れて男も続く。

「トロフィム君もいたのね。おはよう」

眩しい笑顔から飛び出た言葉。おそらく彼女に悪気はないのだろう。

男性の平均身長を手の小指分だけ上回っているトロフィムは、自信のなさから猫背気味である。故に影が薄いのだ。

??そうだ。この人を悪く言っではいけない。

筋の通らない理由をつけ自分を責めることで、彼は己へのダメージを軽減した。もつとも、その捻くれた正義感で救えるのは約一名しか存在しない。密かな健闘に気づく者はおらず、物事は自然の流れに沿って進んでゆく。男の心情など構うに値しない代物だったのだろう。

「アナトリー君を探していたんですよ、私」

「おれを？」

「そう。今日の午後、お父さんが面会にいらっしゃるらしいわ」

嬉しそうに告げるエリヴィラに対し、アナトリーは露骨に嫌な顔をしている。これまで何度も会っている彼は、父親の偉ぶった態度とネチネチとした話し方を嫌悪していた。しかし、「えー」とも「げえ」とも文句を垂れない。これは男としての意地なのか。

「まだ慣れないのね、アナトリー。でも大丈夫。みんな通って来た

道なんだから」

無言で不機嫌な様子をオルガは「照れてるだけ」と解釈し、人肌程度の温もりを込めた眼差しで見つめる。「見守ってあげよう」という気持ち光線の如く発射されているようだった。彼の努力は無駄となったのだ。

アナトリーは耐えきれず体の前後を反転させ、不貞腐れた。だがそれすらも「照れ」の表れだと微笑するオルガは「そろそろ仕事しなくちゃね」と、担当している乳児たちが待つ方へ歩き出す。ただ、最後に付け加えて言った「バイなら！」は残された四人をぽかんとさせた。

「……私も行くわね。アナトリー君とイライダちゃんを頼むわよ、トロフィム君」

「あ、はい」

「じゃあねーエリヴィラせんせー」

「早くいこうぜ目細」

誰も、追究はしなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6525s/>

Filius Bodhi

2011年11月24日11時54分発行